

にぎわいも暮らしやすさも共創で目指す公益のまち  
三つの湊がもたらす《過去・現在・ミライ》の繁栄

酒田駅前に完成！

《光の湊》そして《ミライニ》

山形県北西部に広がる日本有数の稲作地帯《庄内地方》。その北部にあって、大河・最上川の河口部に開けた酒田の地は、北前船・西廻り(日本海)航路の寄港地・酒田湊を中心に、江戸時代を通じ繁栄を極めたまちとして、今も近世以上に燦然と輝いている。

折しも今年、徳川幕府の指示で、土木技術や治水技術などにも長けた政商・河村瑞賢が、酒田繁栄の要因となった北前船・西廻り航路を整備(寛文12/1672年)してから、ちょうど350年の節目に当たる。取材時(令和4年6月17日)には、酒田市立資料館にて《河村瑞賢/西廻り航路開設三五〇年展》が開催されていた。

その酒田湊の時代から、酒田の中心市街地は物資の集散に便利な現・酒田港(山形県内

唯一の重要港湾)周辺に築かれていた。現在もそれは同様だが、酒田港から内陸側に少しいった位置にあるJR酒田駅前でも、《光の湊》エリアと名付けられた再開発事業(新しい湊II港II交流拠点づくり)が取材時完成間近となっていた(その後、7月31日にグラウンドオープンした)。

近世以前から機能してきた海の玄関口・酒田港(酒田湊)に加えて、酒田市にはもう一つ、酒田市と鶴岡市にまたがるエリアに空の玄関口・庄内空港(平成3/1991年開設)がある。大正3(1914)年開業のJR酒田駅もまた、陸の玄関口の役割を果たしてきた。

しかし、特に日本海沿岸を新潟市から青森市まで結ぶ日本海東北自動車道(酒田市エリアでは当初、山形自動車道として整備)が平成のはじめごろから順次整備され、酒田市内に四つのICが次々開設されていったことにより、連係する高速自動車交通網を使えば

まるやま いたる  
丸山 酒田市長



仙台圏まで最短で約2時間半、東京首都圏とも約6時間半で行き来できるようになった。その一方で、JR酒田駅の乗降客数や特急などの運行数は急速に減っていった。

それに伴い、駅前の過疎化も進み、駅前エリアのランドマーク的役割を果たしていたジャスコ(現・イオン)酒田駅前店の閉店・撤退(平成9/1997年)で生じた約6500㎡の跡地の再開発問題は、平成17(2005)年11月の1市3町(旧酒田市、旧



酒田駅前の湊「ミライニ」は酒田市の明るい近未来のシンボル



酒田市は日本を代表する写真家で名誉市民第1号・土門拳の故郷（土門拳作品を全て収蔵する酒田市土門拳記念館）



市立中央図書館はホテルやレストランとのシームレスな配置が特徴。斬新なレイアウトも好評を得ている

飽海郡八幡町、同松山町、同平田町）の合併に伴う新・酒田市の誕生を挟んで、歴代市長にとつての重要懸案事項として推移してきた。前述のＪＲ酒田駅前、光の湊エリアにおける新しい交流拠点づくり事業は、20年以上にわたり懸案となっていた、酒田駅前（旧・ジャスコ跡地）再開発の最終回答となる期待のプロジェクトなのだ。

「このプロジェクトを推進するのは酒田市と、プロポーザル方式で公募決定した建設会社とで設立した『光の湊株式会社』です。海に向かって開けた酒田港、空に向かって開かれた庄内空港に加え、高速自動車交通網と共に陸路における交流拠点として、大正時代から重要な役割を果たしてきた酒田駅前の機能を再編・進化させるためのプロジェクトです。光の湊エリアというネーミングには、酒田駅前が近未来に向けて開けた、第三の湊（港＝交流拠点）になってほしい、という願いも込められています。

光の湊エリアの再開発プロジェクトは、酒田市立中央図書館や酒田駅前観光案内所、市営立体駐車場、広場、バスベイ（バス発着所）などからなる公共施設《ミライニ》の建設に加え、ホテル（月のホテル）、レストラン、レジデンス（マンション型集合住宅）などの民間施設を複合的に組み合わせ、それらの集合体を核に、駅周辺全体を巻き込んで面的・立体的に活性化の仕掛けを創出する事業です。

今年4月に市営立体駐車場が供用開始、5

月には市立中央図書館も移転開館、図書館と同一建物内で隣接する「月のホテル」やレストランは、令和2年11月に先行オープンしています。さらに今年8月1日に広場やバスベイが供用開始されることで、ミライニおよび光の湊エリアが、晴れてグランドオープンということになります」

そう語るのは丸山至酒田市長だ。丸山市長は昭和52（1977）年4月に旧・酒田市役所に入庁し、財務部長や総務部長などを歴任。平成17年11月の1市3町の合併による新・酒田市の誕生後、平成24（2012）年12月に副市長に就任。本間正巳前市長（新・酒田市第2代市長）を支え、新市のまちづくりに取り組んだ。

しかし、本間前市長の病氣療養に伴い、平成26（2014）年からは、実質的に市政運営を担うようになった。さらに平成27（2015）年、本間前市長の死去により、9月に実施さ



れた市長選にて、新・酒田市第3代市長に就任。今年で2期8年目を迎えている。

## 市政運営の基本理念は自治精神が育んできた公益のまちづくり

庄内地方の拠点都市として揺るぎない存在感を放ち続ける酒田市も、全国の地方都市と同様、人口減少の波に見舞われている。

旧・酒田市（昭和8／1933年に市制施行）時代の昭和10（1935）年に初めて10万人を超えた酒田市の人口は、昭和30（1955）年の12万8264人をピークに漸減を続け、合併の年でもある平成17年には11万人台、平成27年には10万人台となり、令和3（2021）年2月末の段階で9万人台に突入。今年7月31日現在で9万7884人となっている。



酒田港を見下ろす日和山公園に建つ河村瑞賢像

国勢調査で分かる範囲内の記録をたどると、現在の酒田市を構成する旧1市3町を総計した人口が10万人を切ったのは、昭和15（1940）年以後のことになるといえる。「現在の時代状況を考えれば、特に酒田市のように古い歴史を持つ都市ほど、何かの活性化事業を一つ二つ行



河村瑞賢像の視線の先には、西廻り航路で活躍した千石船（縮尺1/2）（日和山公園）

えば人口動態が好転するというようなことは、まず望めません。しかし、それで手をこまねいていたのでは事態が悪化するばかりで、産業の活性化やにぎわいの創造などには、手を抜かず取り組んでいく必要があります。

そういう意味合いにおいて、公共施設ミライニを中心とする、近未来に向けて開いた、第三の湊（港）としての光の湊エリアの持つにぎわい創出の可能性には、大いに期待をしております。

それと共に、既存の地場産業に文字通り『新たな風穴』を開ける可能性があり、同時にカーボンニュートラル社会の実現にも資する



日和山公園から酒田港、木造洋式灯台（明治28年点灯、廃止後移築保存）を遠望

有力な事業の一つとして、酒田港周辺では既に4社14基の風車が稼働している通常の風力発電事業と共に、現在、計画が進められつつある『遊佐町沖洋上風力発電』『酒田市沖洋上風力発電』事業の動きにも、私は非常に大きな期待を抱いております」（丸山市長）

既に令和3年9月に有望区域となっている遊佐町沖は別として、酒田市沖洋上風力発電の事業化の現状は、緒に就いたばかりという段階だ。しかし、今年2月には「山形県地域協調型洋上風力発電研究・検討会議」（座長・吉村昇東北公益文科大学前学長・現学事顧問／名誉教授）の分科会「酒田沿岸域検討部会」（部会長・三木潤一東北公益文科大学公益学

# 酒田市

(山形県)

## 市 政 ル ポ



酒田港と酒田市街地を一望(出典：国土交通省東北地方整備局酒田港湾事務所)

の滑り出しと言えるだろう。

ところで今、酒田市沖洋上風力発電の検討を行う組織として「検討会議」および傘下の「検討部会」について触れたが、検討会議の座長、検討部会の部会長がいずれも《東北公益文科大学》の教員代表で構成されていることに着目したい。

東北公益文科大学(以下、公益大)は、山形県ならびに庄内地方14市町村(平成の大合併を経て現在は2市3町)を設置者とする公設民営の大学だ。設立に当たっては慶應義塾大学の知的支援を受ける形で進められ、平成13年に開学。「公益学の創造と実践」を掲げる、唯一無二の大学で在り続けている。

部長/教授)において、酒田市沖での洋上風力発電導入について多角的に検討する第1回オンライン会議(委員33人)を実施。酒田市沖は風の状況も海底の地質状況も良く、かなり有力との計測データが発表された。

今後は事業化に向けてのさらなる検討が、県や国などの関係機関を交えながら、各方面で続けられていくことになるが、まずは上々の滑り出しと言えるだろう。

「こんなことは到底できないと初めから自主規制してしまう規制概念」を取っ払おう(突破しよう)とする姿勢が、何事につけても課題克服には不可欠で、ひいては課題の尽きない市政運営には最も大事なこと。さらに、その根本原理が「公益の追究」だということとを端的に示している。

繰り返しになるが、洋上風力発電のような公共性が非常に高く、しかし、環境問題も含めてさまざまな立場からの賛否が集中しやすい事業を行うには、それが「公益にかなった事業であるか否か」ということが、事業化を推進する際の最大の判断基準になるだろう。

そして開学から21年目を迎えた現在、地域の進むべき重大な方針の検討を担うような会議においても、地元を代表する智(知)の拠点として中心軸を担うようになってきていることが、先の洋上風力発電検討会議の陣容からも、改めてよく分かるのだ。

丸山市長は今回のインタビュも含めて、常日ごろから「私のモットーは規制概念をとつば(突破)らえ！」であり、「その根本には《公益学》の存在がある」と発言されている。ここで言われている《公益学》こそは、公益大が開学以来、追究し続けてきた一大テーマと直結している。

「丸山市長のモットー」は、既成概念ならぬ「こんなことは到底できないと初めから自主規制してしまう規制概念」を取っ払おう(突破しよう)とする姿勢が、何事につけても課題克服には不可欠で、ひいては課題の尽きない市政運営には最も大事なこと。さらに、その根本原理が「公益の追究」だということとを端的に示している。

繰り返しになるが、洋上風力発電のような公共性が非常に高く、しかし、環境問題も含めてさまざまな立場からの賛否が集中しやすい事業を行うには、それが「公益にかなった事業であるか否か」ということが、事業化を推進する際の最大の判断基準になるだろう。

「『公益学』とは何か?」を私の言い方で説明しますと、要するに『世のため、人のため、まちのため』の学問と言えます。行政も、産

業も、科学技術も、文化芸術も、教育も、福祉・医療も社会資本整備も、全ての分野で存在し得る、利害を超えた政策原理こそが《公益》だと私は考えております。

『公益学』とは、それを理論的に体系化する学問であり、酒田市に大学が、鶴岡市に大学がある公設民営の《東北公益文科大学》は、この公益学の確立と普及、それを実践できる人材の育成などを目的に開学して、既に多くの人材を輩出しております(丸山市長)

このように「公益学の追究」を一枚看板にする大学が酒田市にあるというのは、非常に興味深い。

後世「西の堺、東の酒田」と並び称されるほ



塀や門がない東北公益文科大学の開放的なキャンパス

どに、江戸時代を通じて大いに繁栄した交易都市・酒田の最重要な価値判断の基準こそは、まさに《公益》だったからだ。

### 3500年かけ培ってきた 「交易と公益のまち酒田」の未来

酒田湊と江戸を直結する「西廻り航路」の整備を、幕府が河村瑞賢に命じた目的は、最上川流域に点在する幕府直轄領（寒河江、大石田など）からの御城米（年貢米）を、酒田から江戸まで無事に、速く運ぶことにあった。それ以前の御城米の輸送は、敦賀まで海上輸送し、琵琶湖を経由して陸路を江戸に向かうルートが一般的で、積み替えが多く、輸送日数もかなり要したため、米が傷むなどの弊害があった。しかし、例えば西廻り航路が整備



近代日本の米穀流通と庄内米ブランドを支えた山居倉庫（さんきょそうこ）

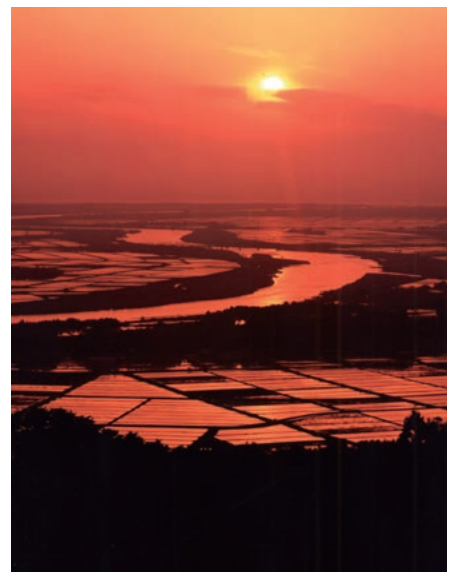
された年は、5月に酒田湊を出港した御城米船が、瀬戸内経由で7月に江戸に到着するなど、大幅に輸送日数を短縮。その有効性が証明された。

かくして、酒田を起点に整備された西廻り航路は、諸藩の御蔵米（年貢米）輸送や、多彩な産品の輸送にも使われるようになり、後の日本の物流そのものにかつてない大変革を巻き起こした。

酒田湊だけに限っても、最上川周辺の幕府直轄領からの御城米や各藩の御蔵米のほか、青苧や紅花、蝦夷地の海産物（塩鮭、ニシン、肥料用のニシン粕、コンブなど）、瀬戸内の藍や木綿、塩など、換金価値の高い各地の特産物が取り扱われ、各寄港地で盛んに売買されるようになった。

御城米や御蔵米などの基本的な商品のほかに、何を積み、何を売るかは船主の裁量・才覚に任されていた。そのため現在、北前船は「動く総合商社だった」との評価が与えられている。

一航海の成功で莫大な収益を上げることのできた北前船交易は、多くの大富豪（船主）有力商人（有力町人たち）を生み出す要因にもなった。中でも有名なのが司馬遼太郎の代表作の一つ『菜の花の沖』の主役となった淡路島出身の高田屋嘉兵衛、「銭五」の略称で知られる金沢の銭屋五兵衛、後に「日本一の大地主」ともうたわれるようになる酒田の本間家などだ。



流域で産出する米、紅花、青苧などを酒田湊まで運んだ最上川は輸送の大動脈

「商人たちはもちろん莫大な利益を上げわけですが、その財力を私利私欲のためだけに使うのではなく、地域（まち）の発展のためにも惜しみなく使った。その代表的な商人である《酒田三十六人衆》の歴史は、酒田における、中世以来の自治都市としての歴史でもあったのです。物事の是非を決める際の価値基準こそが、先ほども言いましたように『世のため、人のため、まちのため』の《公益》の視点だった。そういう意味からも、私の市政運営の根本は、《交易と公益のまち酒田》の発信に、とことんこだわった市政と考えております」（丸山市長）

公益大の開学以後、酒田市では、市民と教員・学生が一体となって取り組む地域づくり、環境づくり、いわゆる「大学まちづくり」を目指し、さまざまな取り組みが行われてきた。市街地と大学のキャンパスを隔てる塀はなく、学生たちは酒田市や庄内地方全域を研究・活動のフィールドとし、実践的な公益を

# 酒田市

(山形県)

## 市 政 ル ポ



トビシマカンゾウは鳥海山・飛鳥ジオパークの象徴であり酒田市の花になっている



酒田市の有人離島・飛鳥では若者たちの起こした地域活性化のための企業も大活躍

「市民（市内企業も含む）」とのパートナーシップの下、酒田市に暮らす人、市外に暮らす酒田市との関係の深い人など、多様な領域の主体の協働によって『まちを創っていく』こと、すなわち『まちの未来を共創していく』ことこそが、私の考えるこれからの《公益のまちづくり》です」（丸山市長）

ここ2年ほどは、新型コロナウイルス禍の影響で積極的な観光誘致はできないでいた。しかし、酒田市には本間家ゆかりの歴史的建造物など有力な都市観光の資源、食の魅力を満喫できる人気スポットなどが豊富だ。ま

学んでいる。地域の人々も大学の図書館やカフェテリア（学生食堂）などを自由に利用。コロナ禍においてはそうした関係にも制限が生じざるを得ない部分もあるが、酒田市が主催するイベントや地域活動に大学の教員や学生たちが協力したり、市民団体やNPO団体などと学生・教員たちとの交流、協力関係なども相変わらず濃密だ。

公益大が開学して7年目の平成19（2007）年12月には《酒田市公益のまちづくり条例》を制定。酒田市と酒田市民、公益大との連携による、公益を基軸とするまちづくりへの指針が明確化された。



出羽富士とも呼ばれる酒田市の象徴・鳥海山。「逆さ鳥海山」はInstagramでも「映え風景」として大人気

た、ダイナミックな大地の遺産を身近に感じられる「鳥海山・飛鳥ジオパーク」（平成28年9月認定）という素晴らしい自然の観光資源もある。

平成29年4月認定の日本遺産「北前船寄港地・船主集落」にまつわる、49市町（港町）の連携による広域観光の振興という、コロナ禍の収束後に展開されるであろう遠大な計画もある。

公益学をより幅広く追究するための体制づくりや、少子化時代の進行を見据えた大学経営の安定化などを図るための公益大の公立化も、山形県や関係市町との連携で本格的にはじまろうとしている。

まちの未来を多彩に共創していくための原動力となる「にぎわい創出」のための



酒田の夏の風物詩「酒田花火ショー」、令和5年度から「酒田2尺玉花火競技大会」に生まれ変わる予定

準備が、いろいろな意味で整いつつあるのだ。そして今、JR酒田駅前を夜に訪れると、13ページの写真にあるような光に満ちたミライニ、未来に向けた《光の湊》（交流拠点）と出会える。

ここでこれから展開されるはずの交流は「人・モノ・情報」の新たな交易であり、その光り輝くにぎわいこそは、酒田市が推進する公益のまちづくりの新たな灯<sup>ともしび</sup>とも言えるだろう。（取材・文〓遠藤隆／取材日〓令和4年6月17日）